

プロダクトプロビジョニング – MacOS X 設定事例

2021/01/15

株式会社ウィザース
Workspace ONE サポート

本設定事例は、Workspace ONE UEM (以下 WS1 UEM) のプロダクトプロビジョニング機能を利用して、MacOS X デバイスに対してスクリプト実行する設定事例となっております。

プロダクトプロビジョニング機能におけるスクリプト実行は、4つのステップで操作を進めていきます。

- STEP 1: **[事前準備]** 実行可能なスクリプトファイルや実行ファイルの準備、および、必要なデータファイルの準備を行います。
- STEP 2: **[ファイル/アクション]** 展開するスクリプトファイルのアップロード、および、ファイル操作のアクションなど、管理デバイスに対する操作を WS1 UEM コンソールで行います。
- STEP 3: **[プロダクト]** 管理デバイスへの割り当てなどの設定、および、管理デバイスへの展開を WS1 UEM コンソールで行います。
- STEP 4: **[確認]** 管理デバイスおよび WS1 UEM コンソールで実行結果を確認します。

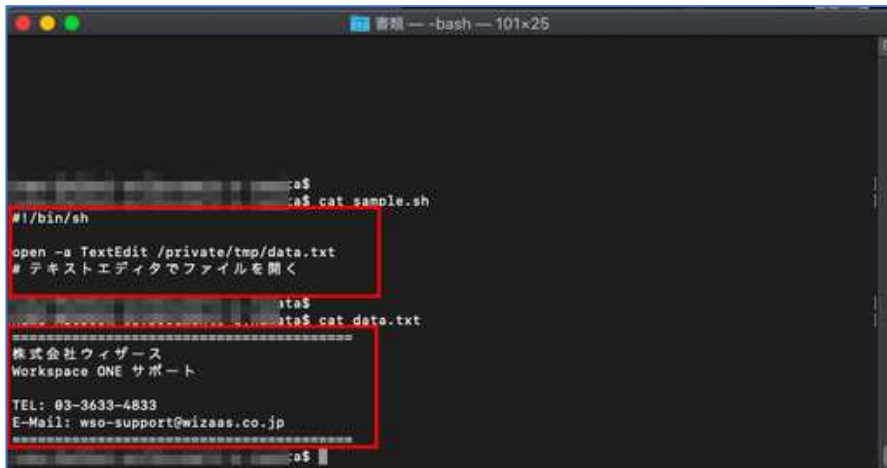
STEP 1: [事前準備]

本設定事例では、下記のサンプルスクリプトを用意して動作の確認を行います。

本事例では、スクリプト実行時の動作がわかりやすいように、アプリの起動としております。

sample.sh: MacOS のテキストエディタを起動し、“data.txt” を開くシェルスクリプトです。

data.txt: サンプルテキストファイルです。



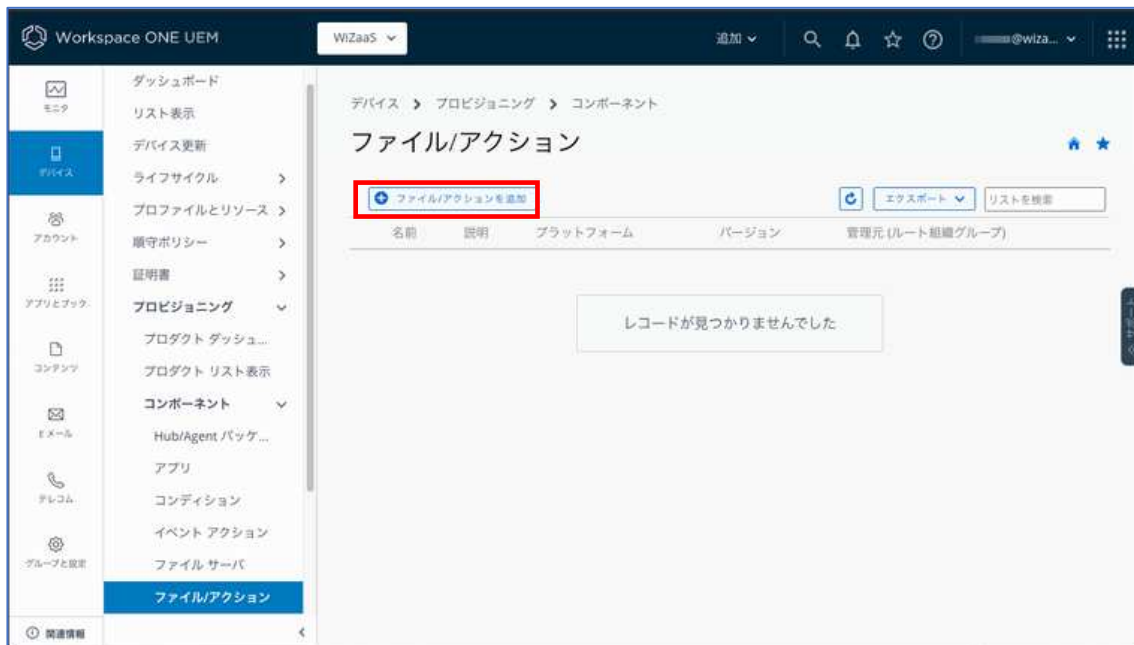
```
macos ~ % a$ cat sample.sh
#!/bin/sh
open -a TextEdit /private/tmp/data.txt
# テキストエディタでファイルを開く

macos ~ % a$ cat data.txt
=====
株式会社ウィザース
Workspace ONE サポート
TEL: 03-3433-4833
E-Mail: wso-support@wizaas.co.jp
=====
macos ~ % a$
```

STEP 2: [ファイル/アクション]

WS1 UEM コンソール > デバイス > プロビジョニング > コンポーネント > ファイル/アクション をクリックします。

次に [+ファイル/アクションの追加] をクリックします。

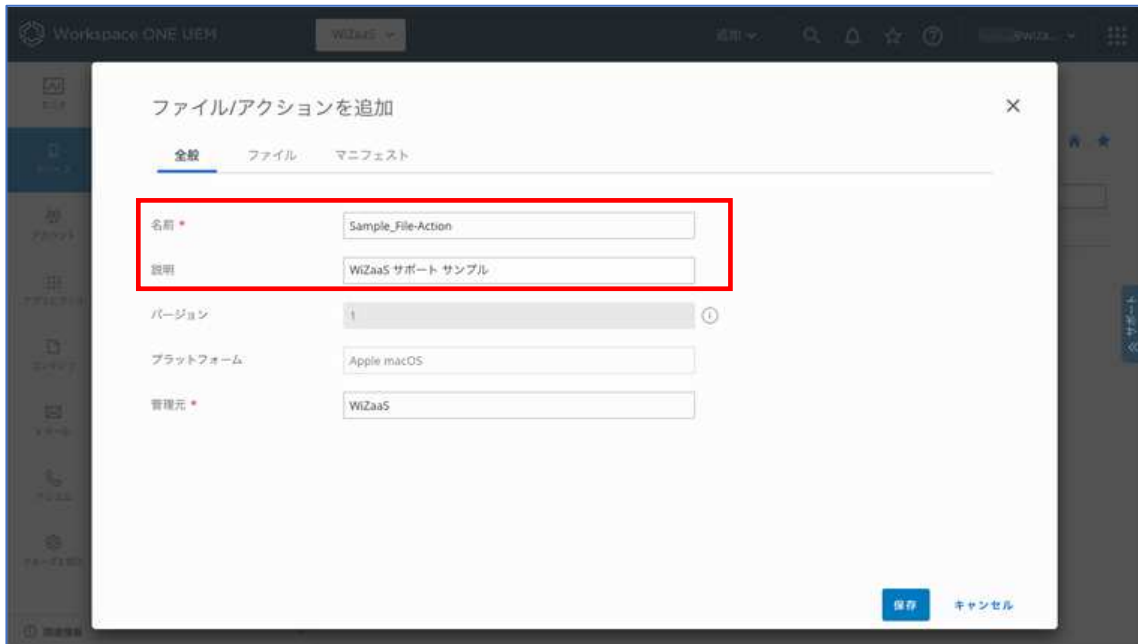


スクリプト実行のターゲットとなるプラットフォームを選択します。

本事例では macOS です。



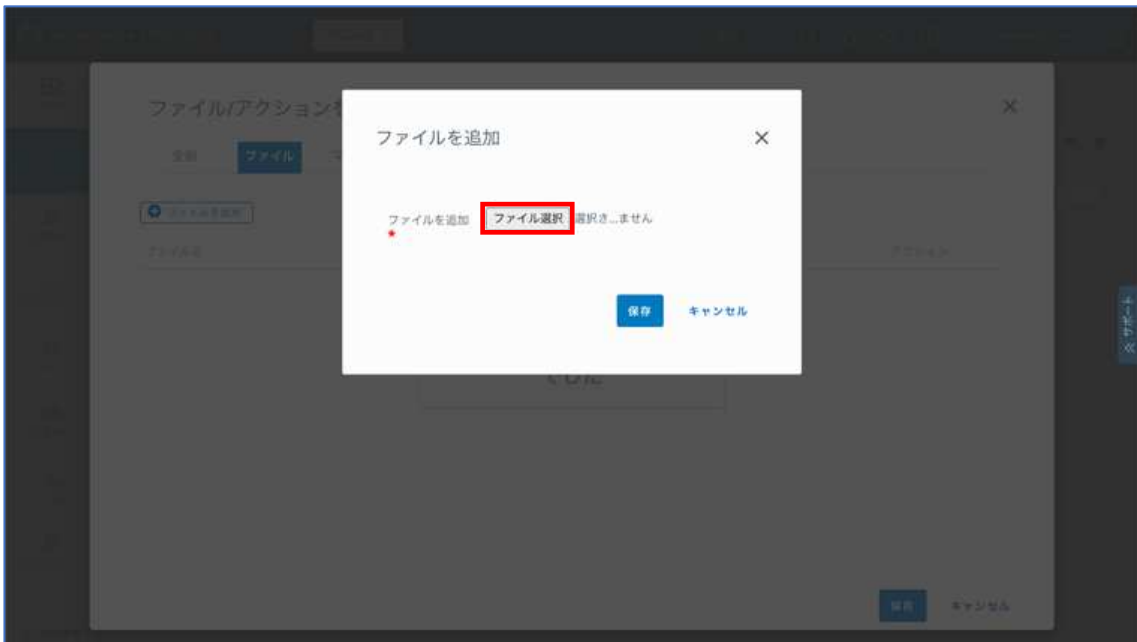
[全般]タブにて、「ファイル/アクション」の名前を入力します。説明は任意入力です。



[ファイル]タブにて、スクリプト実行時に利用するファイルをアップロードします。アップロードしたファイルは、プロダクト実行時に管理デバイスへダウンロードされます。[+ファイルを追加]をクリックします。

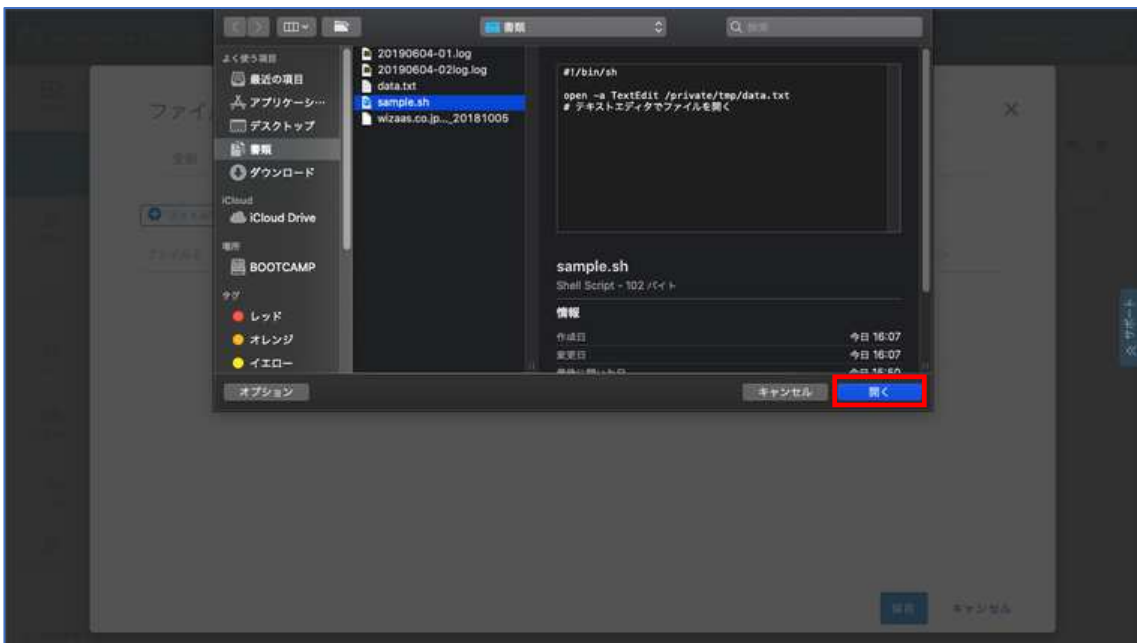


[ファイル選択]をクリックします。



操作を行っている作業用 PC からファイルを選択します。

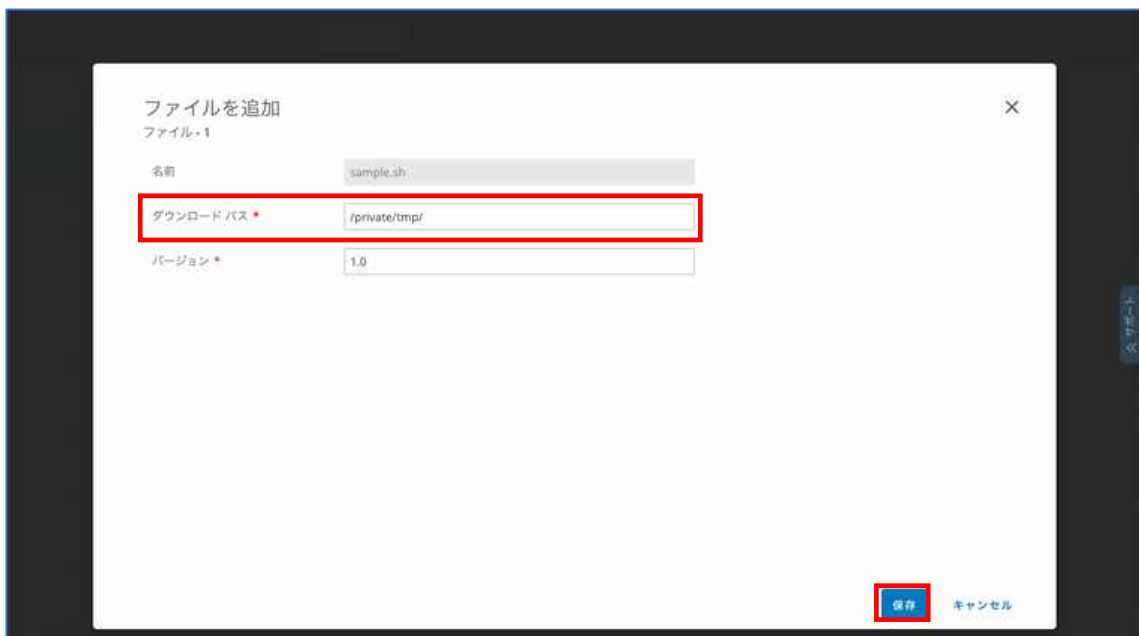
本事例では、スクリプトファイル"sample.sh"を選択して、[開く]をクリックします。



ファイルが選択されていることを確認後、[保存]をクリックします。

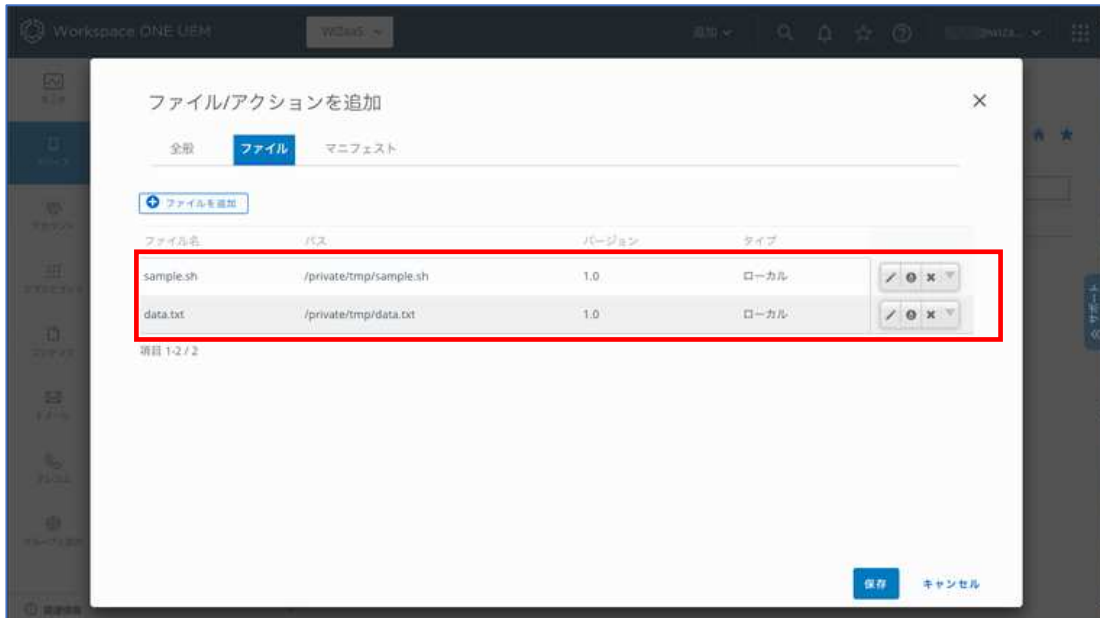


アップロードしたファイルの保存場所（管理デバイスへのダウンロード先）を指定します。
「ダウンロードパス」を入力して [保存] をクリックします。
本事例では、「ダウンロードパス」に “/private/tmp/” を指定します。



スクリプト実行で使用するファイルを全て同様の手順でファイルアップロード、および、ダウンロードパスの指定を行います。

本事例では、“sample.sh” と “data.txt” のアップロードとダウンロードパスの指定を行っています。



[マニフェスト]タブにて、ファイル操作のアクションを指定します。

プロダクト実行時に管理デバイスに対して指定したファイル操作のアクションが実行されます。

インストールマニフェスト [+処理を追加] をクリックします。

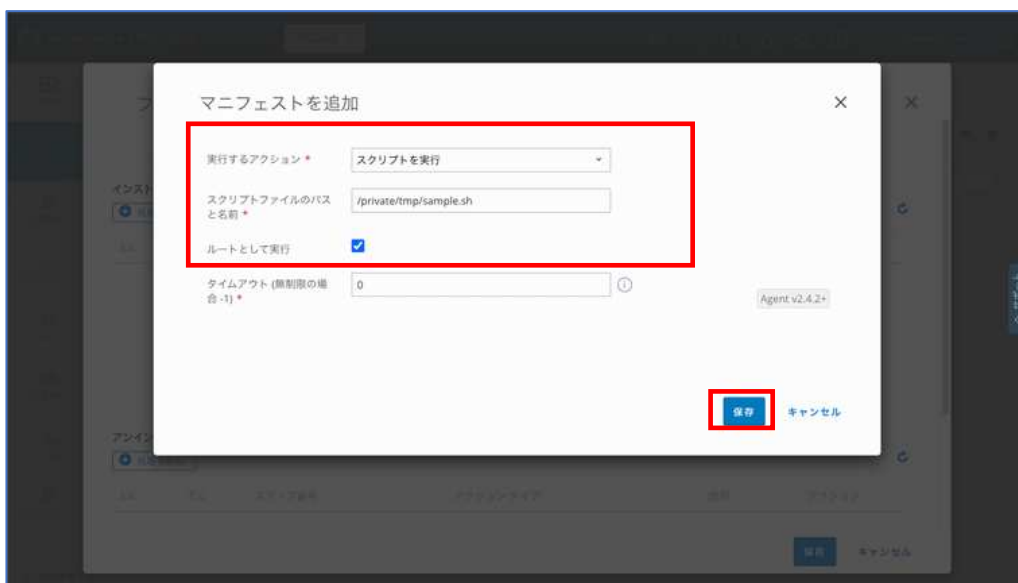


ファイル/アクションのマニフェストには、「ファイルのコピー」、「ファイルの移動」、「ファイルの削除」、「スクリプトの実行」等の各種ファイル操作におけるアクションをひとつ指定することができます。

複数のファイル操作が必要な場合は、複数のファイル/アクションのマニフェストを作成します。

本事例では、実行するアクションを「スクリプト実行」とし、[ファイル]タブで指定したスクリプトファイル“sample.sh”の実行を指定します。

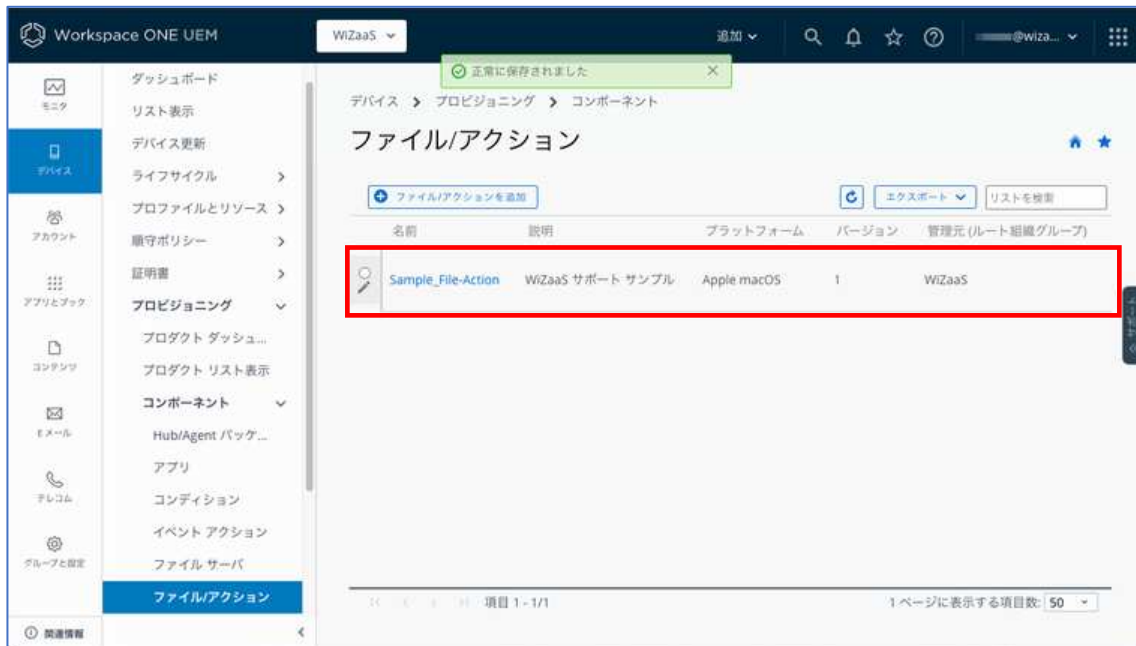
スクリプト実行時にルート権限が必要な場合は、「ルートとして実行」のチェックボックスにチェックを付けます。内容を確認後、[保存]をクリックします。



マニフェストが追加されていることを確認して、[保存]をクリックします。



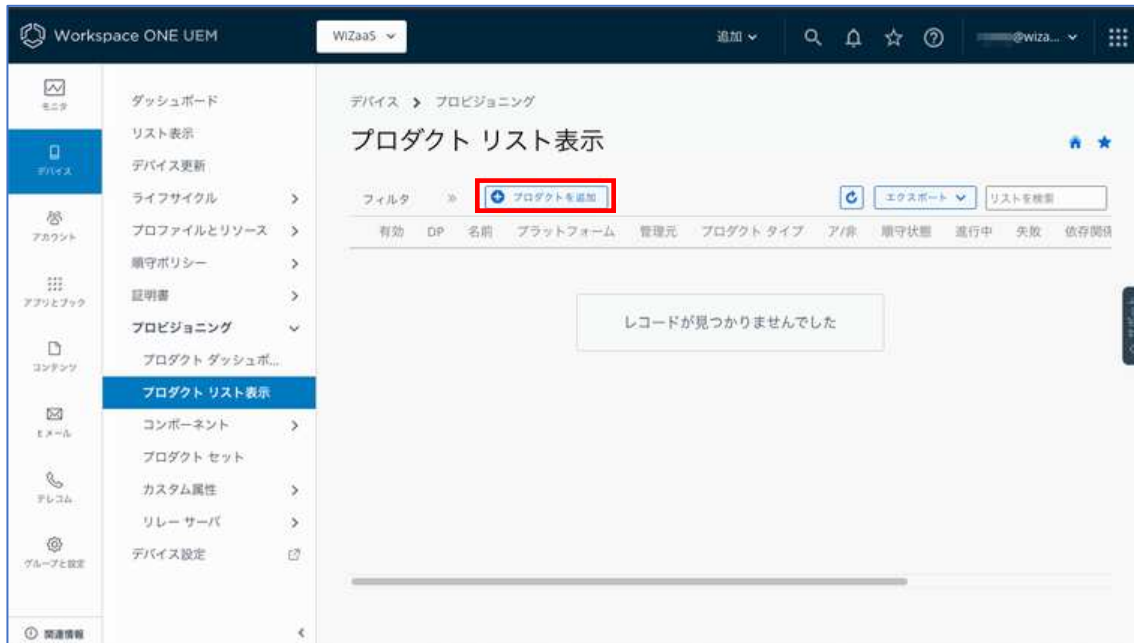
正常に保存が完了すると、「ファイル/アクション」が作成されます。
作成された「ファイル/アクション」は、後から編集することも可能です。



STEP 3: [プロダクト]

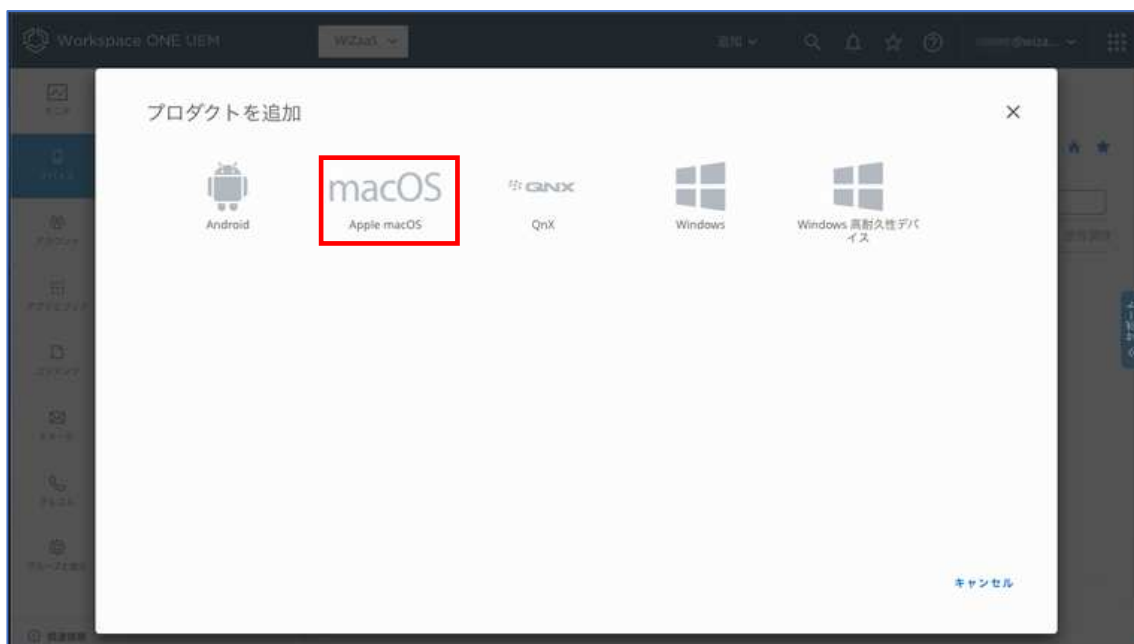
WS1 UEM コンソール > デバイス > プロビジョニング > プロダクト リスト表示 をクリックします。

次に [+プロダクトを追加] をクリックします。

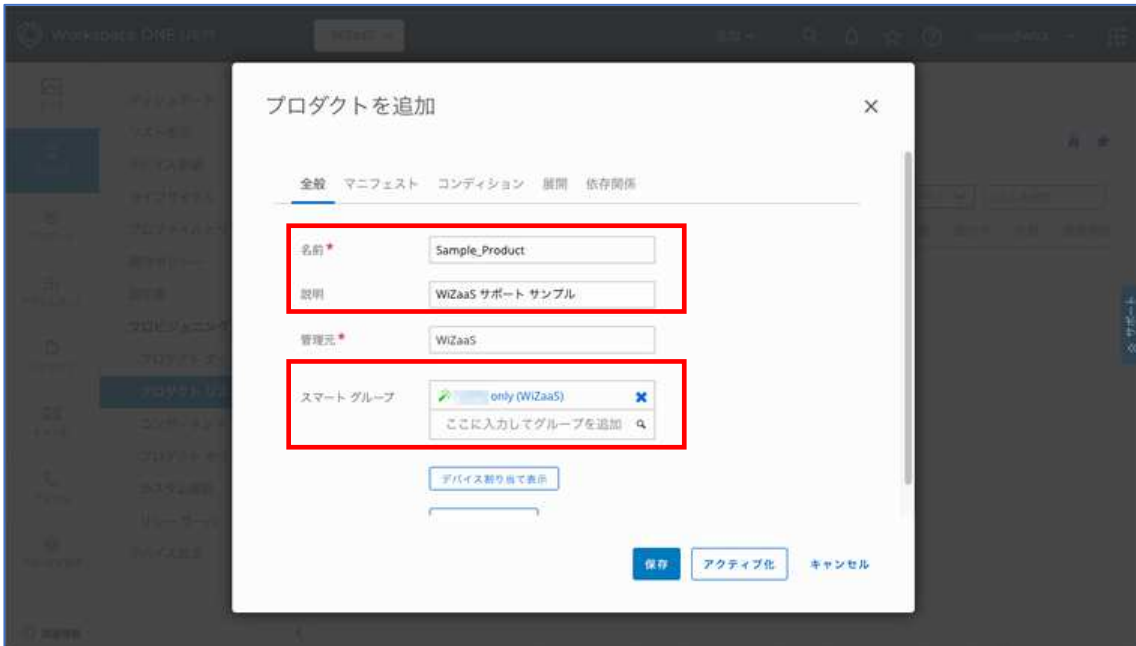


プロダクト実行のターゲットとなるプラットフォームを選択します。

本事例では macOS です。



[全般]タブにて、「プロダクト」の名前を入力します。説明は任意入力です。
作成した「プロダクト」を割り当てるデバイスをスマートグループで指定します。



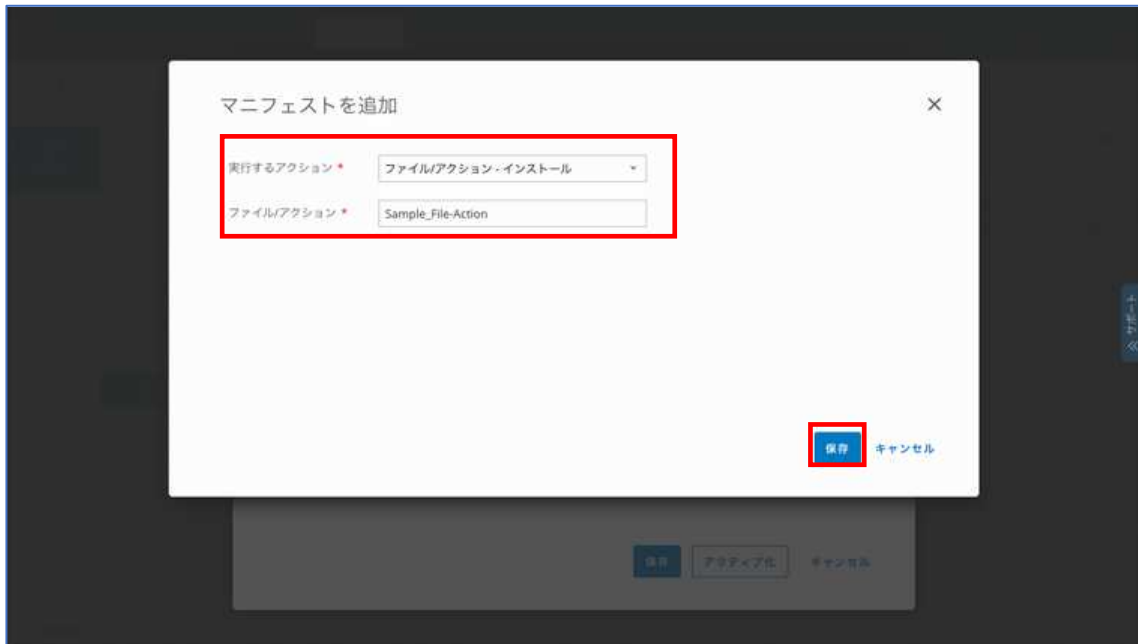
※プロダクトプロビジョニング機能におけるスクリプト実行の検証を行う際には、本番運用に影響を与えないスマートグループを利用することを推奨しております。

例) 検証機をまとめたスマートグループの作成と割り当て

[マニフェスト] タブにて、実行する「ファイル/アクション」を指定します。
[+追加] をクリックします。



STEP2 で作成した [ファイル/アクション] を選択し、[保存]をクリックします。



プロダクトのマニフェストが追加されていることを確認後、[アクティブ化]をクリックして、プロダクトを有効にします。

本事例では、ひとつのプロダクトを作成しておりますが、複数の「ファイル/アクション」を実行する場合は、複数のプロダクトのマニフェストを作成することが可能です。



プロダクトが適用される管理デバイスの一覧が表示されます。

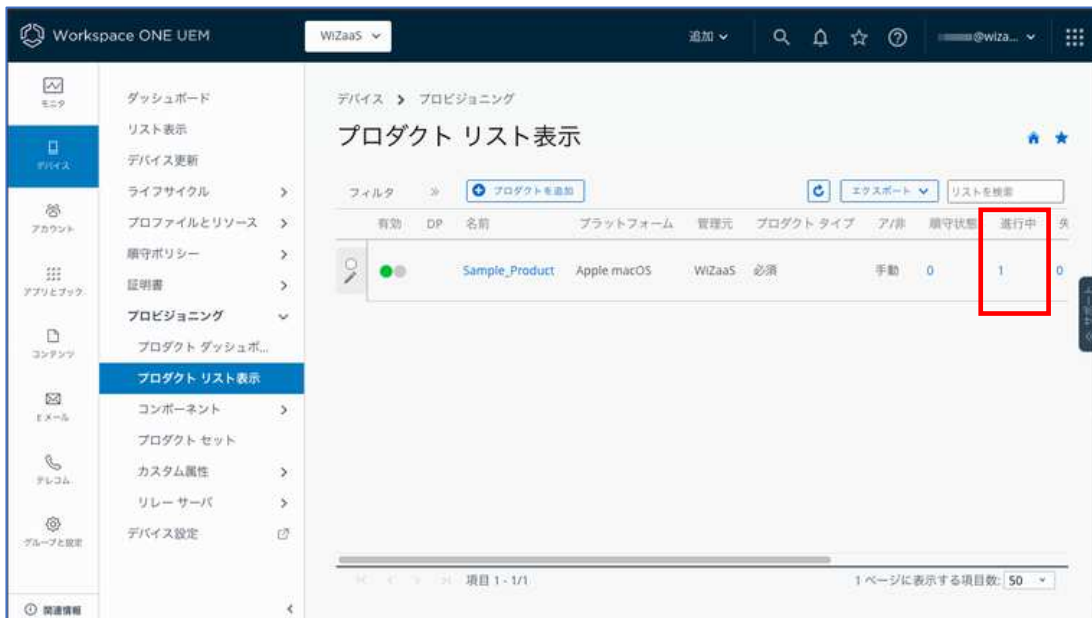
適用される管理デバイス一覧に問題が無ければ、[アクティブ化]をクリックします。



作成したプロダクトの保存、および、プロダクトが有効化となります。

プロダクトは「進行中」のステータスであることが確認できます。

(赤枠内の数字はプロダクトが割り当てられた管理デバイスの台数です)



STEP 4: [確認]

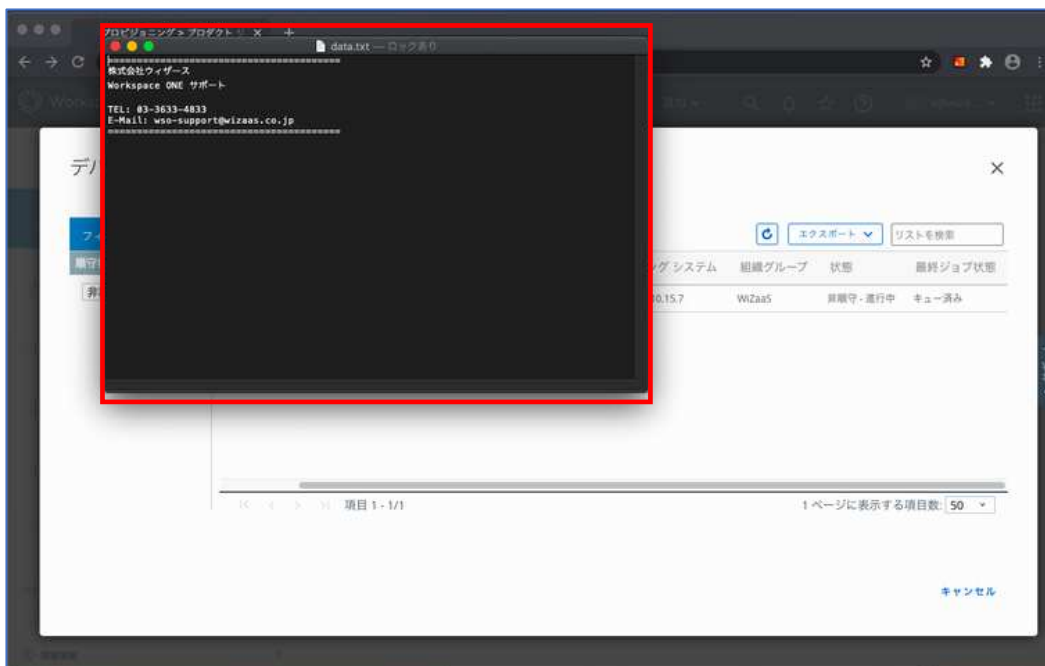
上図、赤枠内の数字をクリックすることにより、プロダクトが割り当てられた管理デバイスの進行状況の確認が行えます。



※上図は、[進行中] のフィルタがかけられています。必要に応じてフィルタの変更を行ってください。

本事例では、WS1 UEM コンソール作業用 PC、管理デバイスとしての MacOS、同一の MacOS - PC で操作を行っております。

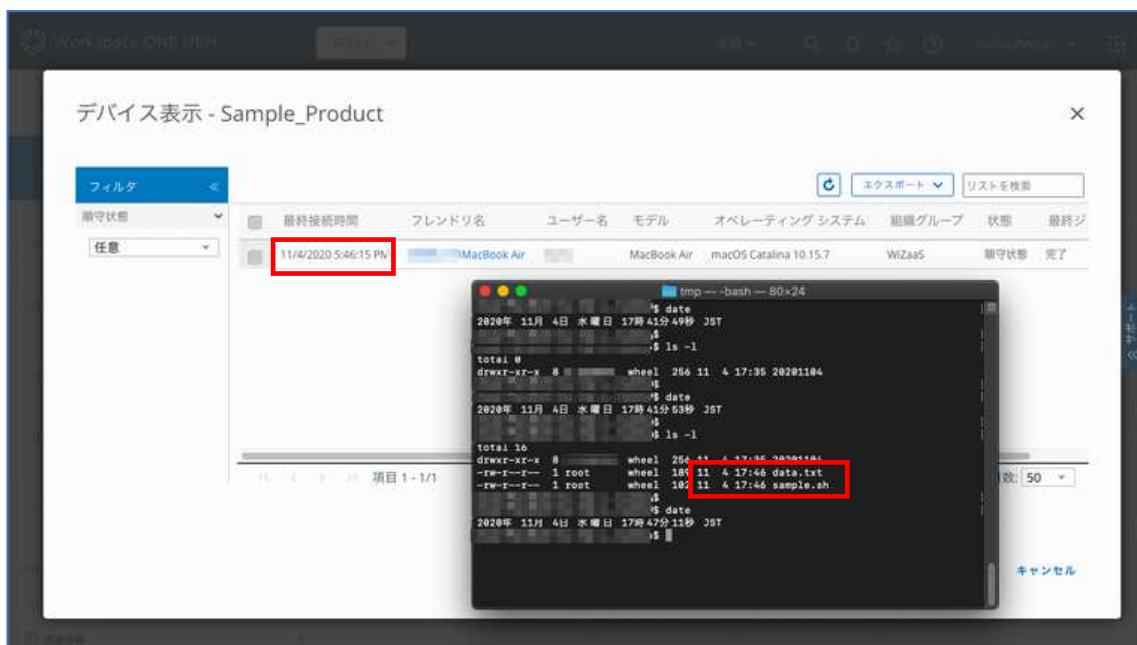
その為、プロダクトプロビジョニングが成功すると、WS1 UEM から展開したスクリプトが実行され、テキストエディタが指定したファイルで起動します。



プロダクトが割り当てられた管理デバイスのステータスが完了していることが確認できます。

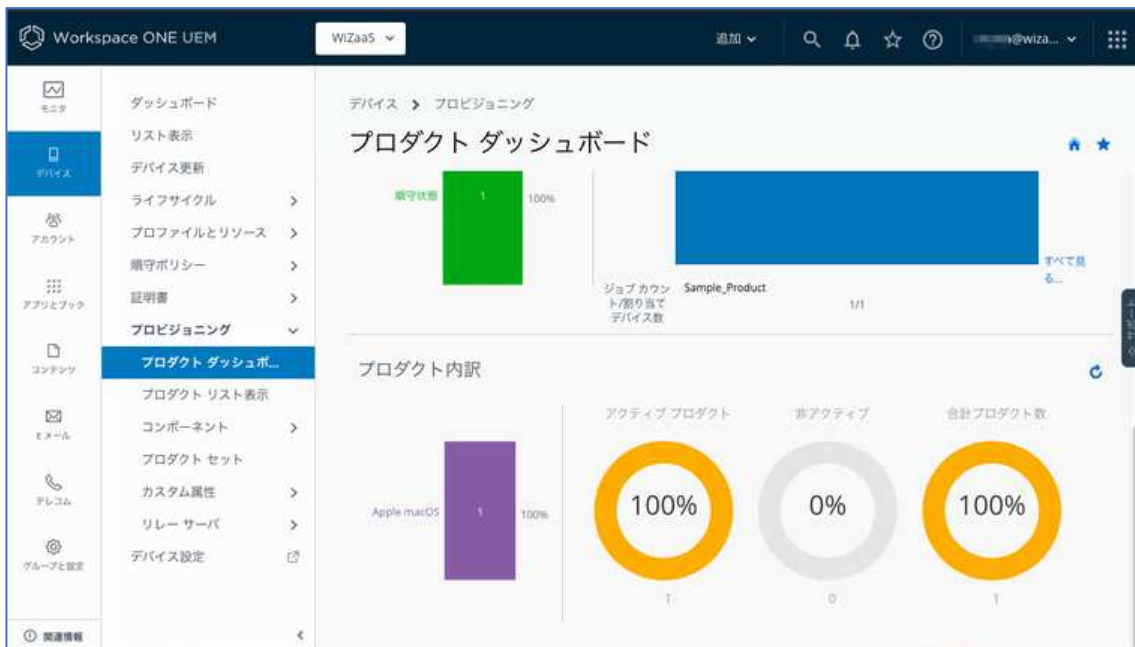
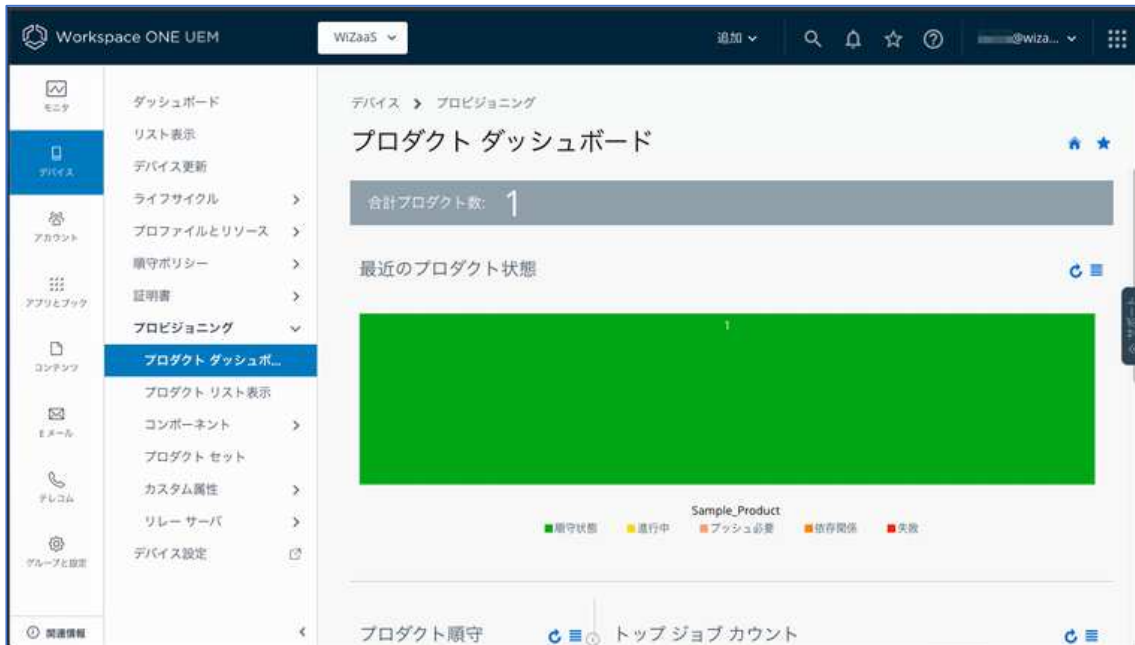


管理デバイスに指定した「ファイル/アクション」のダウンロードパスに、スクリプト実行に必要なファイルが存在していることも確認が行えます。



WS1 UEM コンソールのプロダクト ダッシュボードは、直観的にプロダクトの状況が確認できるようになっております。

また、ダッシュボードからドリルダウンすることにより、該当する管理デバイスの一覧が表示されるようになっております。



以上